

博 士 学 位 論 文

論文内容の要旨及び審査結果の要旨

第 4 号

2013（平成25）年度

追 手 門 学 院 大 学 大 学 院

経 営 学 研 究 科

は し が き

本号は、学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第8条の規定による公表を目的とし、2014年3月24日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を収録したものである。

学位記番号に付した甲は学位規則第4条第1項によるもの（いわゆる課程博士）である。

目 次

学位記号番号 (授与年月日)	学 位 論文題目	氏 名
-------------------	-------------	-----

課程博士

経営博甲第 5 号	博士（経営学）	永田 淳次
(2014.3.24)	プロダクトイノベーションのためのフレームワーク の研究	・・・・・・・・ 1

氏 名 ・ (本 籍)	永 田 淳 次 (大 阪 府)
学 位 の 種 類	博 士 (経 営 学)
学 位 記 番 号	経 営 博 甲 第 5 号
学位授与の日付	2 0 1 4 (平 成 2 6) 年 3 月 2 4 日
学位授与の要件	学位規則 (昭 和 2 8 年 4 月 1 日 文 部 省 令 第 9 号) 第 4 条 第 1 項 該 当
学 位 論 文 題 目	プ ロ ダ ク ト イ ノ ベ ー シ ョ ン の た め の フ レ ー ム ワ ー ク の 研 究
論 文 審 査 委 員	主 査 追 手 門 学 院 大 学 教 授 原 田 章 副 査 追 手 門 学 院 大 学 教 授 篠 原 健 副 査 追 手 門 学 院 大 学 教 授 池 田 信 寛

審査結果要旨

審査報告

以下の諸点を中心に審査をおこなった。

1. 研究テーマの設定（構想力）
2. 論文体系（論理構成、分析力、結論内容）
3. 口頭試問（集約力、表現力、説得力）
4. 文献渉猟
5. 研究業績

1. 研究テーマの設定（構想力）

日本の製造業の国際競争力が失われつつある。筆者が長年属したエレクトロニクス業界が特にそうである。パソコン産業にみられるように、組み立て部分の付加価値が低下するといういわゆるスマイルカーブ現象により、人件費の高い先進国から新興国にその部分が移転している。グローバルなサプライチェーンの進化により世界的なレベルでの最適生産の仕組みが発達しつつあることがこれを後押ししている。

筆者は大手通信機メーカーにおいて長年研究開発とMOT（技術経営管理）に従事してきたおり、この隘路を打開するためには、製造業におけるイノベーションが求められるとしている。本論文は製造業におけるイノベーションを支援するための具体的な方法論に着目しその体系化を試みている。

2. 論文体系（論文構成、分析力、結論内容）

前述の論点を論理的かつ体系的に述べるために以下の章立てに構成されている。

序章

- 第1章 製造業のビジネス環境
- 第2章 製造業が直面する課題解決の方向
- 第3章 アイデア創出のフレームワーク
- 第4章 イノベーション具現化のフレームワーク
- 第5章 戦略立案のフレームワーク
- 第6章 あとがき

全体的に、必要な論点が系統的に組み立てられており、論理の流れがよどみなく展開されている。各章の概要は以下の通りである。

序章

序章においては、研究の目的、背景と問題意識、研究の範囲、論文の構成について述べている。まず「イノベーション」について、本論文では、シュムペータが言う新結合（イノベーション）に示された類型との関連で「新しい生産物または生産物の新しい品質の創出と実現」を議論するとしている。製品およびビジネスのイノベーションを研究の範囲としている。

本章では、このイノベーションの実現を支援するための仕組み（フレームワークと呼ぶ）の重要性を指摘し、それに関する以下の3つの論点をあげている。この3つの論点は企業におけるイノベーションの推進に際して、逐次的に適用され全体として大きな効果を発揮しうることを意図している。

（論点1）ビジネスアイデアの創出

（論点2）製品イノベーションの具体化

（論点3）製品イノベーションの戦略立案

第1章 製造業のビジネス環境

本章では論文全体の議論の背景と範囲を明確化することを目的に、特にICT（情報通信技術）の進歩が製造業の製品やビジネス環境に与える影響について分析をしている。筆者はICTの急速な発展による製品とビジネスへの主要な影響を「コンシューマライゼーション」という概念で示し、その構成要素の特徴と内容を分析している。本章は次章以降における議論の展開の基礎となっている

第2章 製造業が直面する課題解決の方向

本章では、前章で述べた課題を解決するための方法論について論じている。一般に新製品開発のアプローチには、顧客のニーズから分析するニーズプルと、開発した機能や素材を組み込むシーズプッシュの二つがある。本章では、製造業における4つの典型的なイノベーションの事例を取り上げ考察している。良く知られているジェットエンジンの遠隔保守サービス革新もそのひとつである。

筆者は、技術を始点としながらそれを製品、ビジネスのイノベーションにつなげることの難しさと、それを支援する方法論のあり方について述べている。そのうえで、序章で述べた3つの論点について先行研究を紹介するとともに、その課題を分析している。特に、「りそな銀行と富士通による店舗改革」の最近の事例を取り上げ、ICT（情報通信）の進歩によるイノベーションを説明するためには新たな工夫が必要であることを指摘している。これらの議論は次章以降の具体的な議論の導入部分となっている。

第3章 アイデア創出のフレームワーク

本章では、第一の論点について論じている。「バリューチェーン」はマイケルポーター

(1985) が企業活動の付加価値連鎖を表現するために提案したものであり、1990 年代後半にボストンコンサルティング社が航空機産業の組み換えの議論に適用したものである。筆者は本手法を分析し、これを基礎としながらも、本論文で目的としているイノベーションに適用するための新たな手法を提案している。ICT の進歩によって今までとは異なった革新が生まれつつあることを念頭に、異なった産業分野のバリューチェーンの相互作用をより適切に可視化する 5 つの操作を提案しており、オリジナリティのある内容となっている。

第 4 章 イノベーションの具現化

イノベーションを具現化するためには、製品、必要とする機能、実行する組織、必要な技術や資源などを明確にし、それらを有機的に組み合わせることにより、創出されたアイデアを具現化する必要がある。筆者は、その手法としてチェルキー (2009) の提案する I A (イノベーション・アーキテクチャ) に着目している。筆者は産業界に属していた早い時期からこの手法にかかわる産学の研究の推進に関わっており、これらの実績を踏まえた有益な議論となっている。筆者は、交換機という、日本の通信機器業界がデジタル化による技術革新に乗り遅れた分野を取りあげ、その蹉跌を I A により分析している。その結果、I A において、大きな変革はビジネス領域での不連続を生み出すこと、しかし技術領域においてはその変革につながる要素を見出すことができ、従ってこれらを可視化し解釈・構成することの重要性を指摘している。

第 5 章 戦略立案のフレームワーク

近年、技術の複雑化と開発期間の短縮が進行しており、社内だけでなく社外の資源を取り込む必要性が高まっている。「ビジネスエコシステム」は、従来外部環境とされていた産業構造や市場を内部環境と結びつけるネットワークを指している。この分野の研究は比較的最近始まったものであるが、筆者はキーストーン戦略 (マルコイアンシティ) の考え方の適用可能性を検討している。その際分析事例としてドライブレコーダを取り上げている。国土交通省がすすめる大掛かりな I T S (Intelligent Transport Systems) プラットフォームとスマートフォンという異業種の参入という現状をどのように可視化し戦略立案に結び付けるべきかを議論している。その結果筆者の主張は、ビジネスエコシステムの考え方は自社の立ち位置を明確化するために有効であり、また技術革新の中では、キーストーン戦略は、強者とともに、ニッチの業界や参入者にとっても重要な分析フレームワークであると主張しておりオリジナリティの高い内容となっている。

第 6 章 総括と残された課題

本研究で得られた主な成果を要約し、今後の課題を述べている。

3. 口頭試問（集約力、表現力、説得力）

口頭試問において筆者は、本論文の論点、主張および必要な論理展開を、短時間で説得力をもって説明をすることが出来たと判断する。3つの主要な論点を設定し、各論点ごとに課題、先行研究、主張がなされた点は理解しやすいものであった。全体的に満足すべきものであったと判断する。

4. 文献渉猟

筆者は長年エレクトロニクス業界において研究開発とMO T (技術経営)に取り組んだ経験を有している。従って本論文の実用的な側面を保証するにたる必要な知識、文献が網羅されている。さらに、前述の3つの論点について、必要な理論的枠組みや先行研究も概ね網羅されていると判断した。

5. 研究業績

本研究に関連する公刊された学術論文は13編（国内学会9編、海外学会4編、内ファーストオーサー9編であり、そのうち査読付きの論文は3編（内1篇は単著、2編は共著）である。これらの詳細については学位申請書類一式中の研究業績書に記載されているのでここでは省略する。

判定

博士の学位申請条件を充足していることを確認し、審査委員3名は学位申請論文を慎重に吟味し、博士（経営学）の学位論文として適と判定する。現実社会における重要な問題に関する挑戦的で独創的なテーマ設定と、地道な活動と研究の蓄積から生み出された当該論文の内容と主張は、学位を認定するに足る論文であると判断した。以上審査委員3名による慎重な審査の結果である。

博士学位論文 論文内容の要旨及び審査結果の要旨 第4号
発行日 2014（平成26）年4月28日発行
編集兼発行所 追手門学院大学大学院 経営学研究科
